

越後の国に枝折峠という難所がある。

一帯に榎の巨木が生い茂り、昼尚暗い秘境であるという。その昔、平清盛に都を追われた中納言藤原三郎房利が尾瀬へと向かうその途中、この榎の森へと迷い込み、苦心難渋した際に突如不可思議なる童子が立ち現れ、枝を折り乍ら一行を山頂まで導いたという故事がある故、枝折峠の名があるのである。

その峠より更に奥――。

篠衝く雨に煙る山深い獣径を只管進む、網代笠の僧の姿があつた。

この僧、法名を円海という。円海は草を踏み分け枝を弾いて、ただ足を進めていた。

――早く。少しでも早く――だが。

円海は立ち竦んだ。

折からの激しい雨が山間の谷川をどうと溢れさせている。

澄んだ清流だった筈の小川も、今は上流の泥土や砂利が混じり、最早濁流としかいいようがなかつた。

――これは渡れぬ。

険しい山道である。引き返せば山の中で夜を迎えることになる。

今更戻ることも適わぬし、ならば渡るしかない。この谷川を渡りさえすれば、寺までの道程は残り僅か――多分半日もかからないのだ。山に分け入らず、街道の峠を越えても二日、峠を迂回すれば四日はかかる道程である。この間道を行くなら一日で済むのだ。日暮れ前に川を突っ切れば深夜には山門を潜れるであろうと、円海はそうした腹積もりで歩を進めていたのである。

峠の隅隅まで、急激に疲労感が充満する。

――失敗った。

取り分け先を急ぐ旅でもなかつたのだから、出来るだけ無難な道を行くべきだったのだ。少なくとも街道沿いに来ていれば、このような抜き差しならぬ状況に陥ることはなかつた。

それは判っていた。明け方から雲行きは怪しかったし、円海は今朝の今朝までそう思っていたのだ。それでも――自然に足は山に向いた。難儀な獣径ではあるが、幼い頃から慣れ親しんだ道だったからであろう。この辺りの山は円海にとつて庭のようなものである。その慣れが裏目に出た。天候を読み違えたのである。

――却説。

残る手はひとつしかなかった。慥か上流には古びた丸木橋らしきものがあつた筈だ。そこまですら日暮れ前に着ける。引き返すよりは遙かに得策である。橋を渡ってしまえば――。

——後は何とかなるだろう。

そう考えた。

円海は重い脚を懸命に振り上げて、川に沿い、上流へと進んだ。

たつぷりと水を含んだ法衣が躰に纏わり付く。網代笠にばらばらと雨が当たり、やがて笠の目にも水が滲みだした。顔が上げられぬ。

旅装と雖も、歩き難いこと甚だしい。

ざあざあ。どうどう。

天の底を抜いたような大粒の雨である。

風が凧いであるのが唯一の救いである。慣れた道とはいえ、これで風が強ければ命の保証はなかっただろう。

ざあざあ。どうどう。

しよき。

——何だ。

異質な音がした。

無理に顔を上げる。目の前に男が立っていた。

しとどに濡れたその男は、見たところ円海同様の僧形である。

しかし衣は墨に染まつてはおらず、純白であった。胸には僞箱を提げて、坊主頭を白木綿で行者包みにしている。修験者か巡礼か、否、物乞札売りの類であろう。

男は大声で言った。

「この先はお止めなせエ——」

一本しかねえ橋も朽ちてたようで、流されちまったンでサア——と、その男は言った。

「精精雨宿りでもしなくツちゃ、お互いここで御仕舞いですぜ。このまんま、ウンと下手に下った川岸に、粗末な小屋が建っておりやす。そこで夜明かしてもしねえと——否、この雨じゃア夜が明けたっていけねえやい。いずれお天道様ア拝まなきや御陀仏だ」

「小屋——か」

この辺りに小屋などあったらどうか。

円海には覚えがない。

「誰が住まうか知れぬ荒屋でさア。奴はそこに行くところだ」

「小屋——」

——そう言われれば。

小屋があつたようにも思う。

「ま、御坊のお好きになさるといい」

男は円海の返事を待たずに、泥を跳ね上げて斜面を下り来ると、円海を通り越し、確乎りとした足取りで下流へと向かった。円海は肩越しにその男の背姿を追い、それから網代笠を擡げて橋のあるだろう、或は橋のあつただろう方角に顔を向けた。

目を凝らしてみたが、煙霧に霞んで何も見えなかった。

夕暮れの雨空は益々昏い。
夜が緊緊と近づいている。
雨足は弱まる気配もない。

ざあざあ。どうどう。
しよき。

——駄目だ。

男の言う通り、橋が流されてしまったのならこれ以上の行軍は命取りになる。男の助言に従った方が良さだろう。それならそれで急がねばなるまい。だが——下流に小屋など——。

——小屋などあったか。

円海は踵を返して川筋を下った。男の姿はもう見えなかった。

豪く足の速い男だ。いや、この雨である。早足にもなろう。

道標を失って、視界も悪く、足許も覚束ない。

果たしてその小屋とやらに辿り着けるものか。

濁流のどうどういう音に誘われるように進む。

それしかあるまい。それなのに。

雨の音と、川の音が渾然となる。

どうどう。どうどう。どうどう。

刹那。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。